

アメリカ合衆国と南アフリカ共和国の 「ブラック・パワー」 “Black Power” in the USA and South Africa 交差し分岐する二つの世界 Overlapping and Diverging Two Worlds

峯陽一
MINE Yoichi

1. はじめに

アメリカ合衆国と南アフリカ共和国は、「パラレルワールド」だと考えることもできる。時間軸に沿って二つの空間の人種問題の歴史を俯瞰してみると、同じ場所ではないかと錯視してしまうくらいによく似た出来事が、並行して、数多く起きているのである。それらの出来事のなかには人間と情報の直接の交流が引き金となって生じたものも多くあるが、それらはその後、空間に固有の属性にも規定されて、かなり異なる展開を見せていくことになる。ところが、その帰結として問われる問題が、またよく似ているのだ。しかし類似を確認していくうちに、やはり二つの世界はまったく異なるのではないか、という気もしてくる。共鳴、共振、対照、そして反撥。アメリカ合衆国と南アフリカ共和国という二つの世界は比較史の格好の素材だと言えるだろう¹。

量子力学には「量子もつれ」と呼ばれる現象がある。同時に生成した二つの粒子が東京とニューヨークに存在するとする。東京において粒子のあり方、たとえばスピンの方向が決まると、ニューヨークの粒子のあり方も同時に決まってしまうという不可思議な現象である。片方の対象に対する観察者の働きかけの様態が決まると同時に、もう片方に対する働きかけの様態が決まる。アメリカ合衆国と南アフリカは、そのような意味でもつれていると言

えるかもしれない。「アメリカ黒人研究」に関心をもつ人は、すでにして同時に、「南アフリカ黒人研究」についても、何かしら語るべき言葉があるということである。逆もまた真なり。

本稿では、藤永康政氏と荒木圭子氏の刺激的な論考——前者はアメリカ世界と南アフリカの類型的な〈比較〉に道を開くものであり、後者はアメリカ世界から南アフリカ世界への思想の直接的な〈伝播〉を描き出すものである——を念頭に置きながら、ネルソン・マンデラ、ロバート・ソブクウェ、ステイーヴ・ピコといった指導者の思想と行動に言及しつつ、南アフリカの黒人解放運動史のひとつの断面を示していくことにする。こうした予備的な作業が、さらに広く、深く、持続的な比較史研究の端緒となることを願わずにはおられない。

2. マンデラの遺産

おそらく、ネルソン・マンデラから話を始めるのが適切だろう。2013年12月5日に逝去したマンデラは、世界の尊敬を集めている。英雄が生まれないポスト冷戦時代において、マンデラは東西と南北の世界がつくりだした最大の英雄だった。同月10日に開催された追悼式には数万の群衆が詰めかけ、世界の国家元首が参加したが、とりわけアメリカ合衆国からはバラク・オバマ大統領夫妻に加えて、ブッシュとクリントンの歴代大統領も夫妻で参加する形で異例の敬意が払われた。オバマ大統領とキューバのラウル・カストロ議長が握手するというハプニングも起きた。

いまさら説明するまでもないが、マンデラが象徴するのは、和解と協調、寛容と赦し、潔癖さと民主主義である。彼は白人政権によって、27年間獄中に囚われ、独房に幽閉された。44歳で逮捕されたマンデラは、釈放された時、すでに71歳であった。ところが、自由の身になったマンデラは、白人に対する復讐を説くことはなかったし、自らの投獄に対する償いを求めることもなかった。彼は黒人に対して、実力ではなく投票によって南アフリカを変えようと訴えた。子どもたちには学校に戻るように諭した。白人には、黒人の復讐を怖れる必要はないと説いた。マンデラは、黒人と白人が力を

合わせて南アフリカという「虹の国」を築き上げるべきだと訴え、1994年に黒人として初の南アフリカ共和国大統領に就任した後、潔く1期で退任する。

このような「和解のマンデラ」を称賛するのは、BBCやCNNなどのグローバル・メディアであり、それらの広告主であり、欧米の知識人であり、南アフリカの白人である。暗黙のうちに対比されているのは、白人の土地を奪い、90歳をすぎてもなお大統領の座にあるジンバブエのロバート・ムガベを筆頭とする「アフリカの独裁者」たちである。政敵を迫害し、白人を憎み、権力に執着する者どもよ、マンデラを見習いたまえ、というわけだ。常に理性的なマンデラは、非暴力を説いたキング牧師と並ぶ聖人であり、すべての黒人政治家の模範であると見なされる。1950年代、バスや列車、公園や劇場、教育機関などが人種別に隔離されていく南アフリカの姿は、アメリカ南部の人種状況と双子のようによく似ていた。人種統合のために人種隔離と闘ったキングとマンデラの姿は、あれから半世紀が過ぎた今日でも明示的に重ねられ、ふたりは穏健で成熟した政治家として称賛を浴びている。

ところが、藤永氏は本号の論文において、公民権運動の前半期を「非暴力的」に記憶しようとする言説の欺瞞を暴き、平和主義者としてのキング牧師のイメージの再考を私たちに促している。キング牧師にとって非暴力は「世論喚起のための手段」にすぎず、「暴力的な反応を意図的に挑撥するもの」であり、教会の地下には大量の武器が蓄えられていた。キングは、白人至上主義の暴力性と、白人リベラルの裏切りによって運動が牙を抜かれる危険性を、十分に認識していたというのである。

ここで藤永氏が提示するキング牧師像の再解釈は、南アフリカ研究の側から見ても、非常に興味深い。なぜなら、若き日のマンデラの思想と行動が、まさに藤永氏と同じ方向の再解釈を私たちに求めているからである²。1940年代にジョハネスバーグの黒人居住区で大衆的な通勤バスのボイコット運動を目撃したマンデラは、弁護士の資格をとりつつ、アフリカ民族会議（ANC）の指導者として、50年代には大衆的な反人種主義運動を自ら指揮することになった。8,000人が参加した52年の不服従運動は、暴力には一切頼ることなく、アパルトヘイト法を公然と無視する大衆運動だった。白人専

用の列車に乗り、白人専用の公園に侵入し、夜間外出禁止令を無視した罪で、数千人が逮捕された。しかし、マンデラにとって非暴力はあくまで手段であり、その頃には同志とともに暴力革命の可能性を検討し始めていたという。どのような戦術を使うかは、敵の出方と条件に依存する。「私は完全に客観的でした」³。

暴力も非暴力も、手段にすぎなかったのである。では、マンデラたちの目的は何だったのか。ひと言で言えば、それは反ファシズム人民戦線を構築し、南アフリカを徹底的に民主化することだった。すなわち、人種や階層を横断する広範な統一戦線を結成し、厳格なアパルトヘイト体制を築きつつあった国民党政権を打倒し、一人一票の総選挙を実施し、肌の色にかかわらず全ての「南アフリカ人」が主権を行使する民主主義国家を打ち立てることだった。1955年に採択された自由憲章には、こう書かれている。「南アフリ

カは、黒人も白人も、そこで暮らすすべての人びとに属するのであり、どのような政府も、全人民の意思にもとづくのでない限り、その権威を正当に主張することはできない」⁴。

マンデラは、分け隔てなく友人をつくった。人種主義への怒りを共有し、大義に献身的に身を捧げる者であれば、白人であれインド人であれ、皆が同志だった。白人の同志にはユダヤ人の共産主義者が多かった。インド人にも共産主義者はいたが、皆がガンジーを尊敬していた。ガンジーは22年にわたって南アフリカに滞在し、まさにこの地で、非暴力不服従運動の実験に取り組んでいたのである。運動の中心になったのは、もっとも激しく抑圧されると同時に、

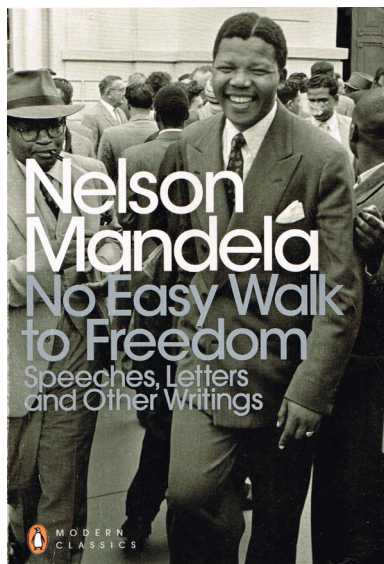


写真1

Nelson Mandela, *No Easy Walk to Freedom* (『自由への容易な道はない』)の表紙(Penguin Modern Classics)。

数のうえでも多数派を占めるアフリカ人たちだったが、アフリカ人の中心性を声高に主張する必要はなかった。一人一票の普通選挙が行われたら、アフリカ人が政府の多数派を占めることになり、アフリカ的なものにじみ出るのは当然だったからである。マンデラは白人支配にも黒人支配にも反対した⁵。単一の「南アフリカ人」が主権者となるならば、アフリカ的なものは問わず語りに自らを主張することになるだろう。

つい最近になって明らかになったことだが、マンデラ自身は、活動家の絶頂期において共産主義者だったという。マンデラの死去の当日、アフリカ民族会議（ANC）と南アフリカ共産党は記者会見を行い、1962年に逮捕された時点で、彼が共産党の党員だっただけでなく、中央執行委員会のメンバーでもあったことを正式に明らかにした。釈放後にマンデラが党に復帰することはなかったが、彼は晩年に至るまで、共産党員を含むANCの組織人としての規律を自らに課していた。交渉時にマンデラが白人勢力との和解に舵を切ったことは事実だが、それは、マンデラに関する言説の多くが単純化するように彼が「善人」だったからというのではなく、組織が戦略的に妥協する決定を下したという要因が大きかったことは確実である⁶。

1964年にノーベル平和賞を受賞したキング牧師と違って、マンデラが釈放後の93年までノーベル平和賞を授与されなかったこと（しかも白人大統領のデクラークと共同受賞だったこと）、そして、2008年までマンデラが米国政府のテロリスト監視対象リストに入っていたことは、彼の根っこのラディカルさがグローバルな権力に承認され、怖れられていたことの傍証になる。さらに、晩年は共産党と一線を画していた（少なくともそのように見えた）マンデラに誉め殺しのような称賛の嵐が渦巻いたことは、マンデラを回収し、無害化しようとする力の大きさを実感させる。藤永氏が言うとおりに、「愛がいったいどんな関係があるのだ」。マンデラは道徳の人というよりは、徹底的に政治家だった。彼は、内戦を回避するという同一の目標のために、1960年前後には解放運動を軍事的に統制しようとし、1990年代には和解の人を戦略的に演じたのである。

3. 人種間政治の弁証法

南アフリカにおいてキング牧師に対応するのがマンデラだとすると、マルコム X、ニュートン、カーマイケルといったラディカルな青年たちに対応する南アフリカの活動家を挙げるとするならば、やはりロバート・ソブクウェ、そしてスティーヴ・ビコということになるだろう⁷。

藤永氏の論文の重要な課題は、〈公民権運動＝善〉〈ブラック・パワー運動＝悪〉とする二項対立を脱構築することであった。南アフリカの文脈に移し替えるなら、和解のマンデラを聖人視すると同時に、アフリカ民族主義や黒人の団結の言説を政治空間から排除しようとする動きが明らかに存在する以上、こうした歴史の単純化に抗して、南アフリカの解放運動の骨太の流れを復権させることが肝要になる。南アフリカにおいて、マンデラたちの多人種統一戦線論に承服せず、アフリカ人ないし黒人の「分離主義」的な運動を唱導したのは、いったいどういう人びとだったのだろうか。かれらの思考は、危険で過激な急進思想、あるいはマンデラが述べるような、「薄っぺらで青くさい」若者の未熟な思考だったのだろうか⁸。

まず、ロバート・ソブクウェを見てみよう。彼は 1918 年生まれのマンデラよりもやや若く、1924 年生まれである。マンデラたちの ANC が白人共産主義者やインド人と密接に共闘していたのに対して、アフリカ人だけで純粹な運動を構築しようと目指す「怒れる若者たち」は、59 年に ANC を割ってパンアフリカニスト会議（PAC）を結成した。ソブクウェは、PAC の議長としてカリスマ的な人気を誇った。ソブクウェの主張に耳を傾けよう。

「私たちは政治的には、アフリカ人のアフリカ人によるアフリカ人のための政治を目指す。そこではアフリカに忠誠を誓い、アフリカ人多数派による民主的統治を承認する準備がある者は、誰でもアフリカ人と見なされる。私たちは少数派の権利を認めない。なぜなら、私たちは集団ではなく、個人の観点から思考するからである」⁹。「私たちは何者にも反対しないことをはっきりさせておきたい。私たちはアフリカに賛成するのである。私たちはアフリカを呼吸して、アフリカを夢見て、アフリカを生きる。アフリカと人間性は不可分だからである。同じことをすることによってのみ、この地の少数派で

あるヨーロッパ人、カラード、インド人は、心と精神の自由を確保することができる」¹⁰。

個人としてアフリカに忠誠を誓う者は誰でもアフリカ人になれる。ただし PAC は、実践的には運動に対する白人の関与を排除し、アフリカ人大衆に急進的な行動を呼びかけた。PAC は ANC の支持基盤を掘り崩し、1960 年前後には破竹の勢いで勢力を拡大していく。しかし、国民党政府によって ANC と PAC はともに活動禁止処分を受け、公然と活動することが不可能になる。マンデラは逮捕され、ソブクウェも逮捕された。主要な反アパルトヘイト運動指導者は全てロベン島監獄に送られるか、または亡命活動を余儀なくされることになった。

このような一斉弾圧によって生じた空白を埋めるべく、1960 年代末から 70 年代に興隆したのが黒人意識運動であり、その指導者が、1946 年に生まれた医学生のスティーヴ・ビコであった。ヘーゲル弁証法、フランツ・ファノン、エメ・セゼール、ケネス・カウンダ、セク・トゥーレなどの思想を駆使しながら、南アフリカの文脈において黒人意識（Black Consciousness）の思想を練り上げたビコは、マンデラに代わり、70 年代の闘争のアイコンとなった。ビコはロベン島に囚われた活動家たちの言葉を引用することはできなかったが、ソブクウェと PAC の思想から影響を受けたことは、明らかだった。

ビコは白人穏健派に対する批判から議論を開始する。「（白人の）リベラルは黒人の抑圧を、美しいはずの風景をそこねる目障りなものとみなしている。だから、その問題を忘れたり、目をそむけたりすることがある。しかし、黒人は一時も逃れることのできない状況を経験しているのである……だからこそ、黒人は白人よりも激しい切迫感をもって語るのである」。「リベラルに、白人用隔離施設の使用をやめてくれとか、大学を中退して黒人と同じ下賤な仕事についてくれとか、頼んでみればいい。答えはいつもこうだ。『でもそれは非現実的なことだ！』……だが、分析をつきつめていくと、白人なら誰でも、特権へのパスポートによって、抑圧者の陣営にいることから免れえないことがわかる」。「黒人はかくも長い間劣等感を抱かされてきたために、自分たちを平等に扱ってくれるかのように見える白人と紅茶やワイン、

ビールを飲むことを心地よく思うのだ。そうして、彼らはエゴを膨らませ、白人から同様の扱いを受けていない黒人に対し、軽い優越感をもつまでになる。彼らは、共同体にとって危険な黒人である」¹¹。

黒人意識の概念そのものを、ビコは次のように説明する。「抑圧者の手中にあるもっとも強力な武器は、被抑圧者の心である」。「『黒人意識』は心の態度であり、生活様式であり、これまでの長い間に黒人世界から発した呼びかけのなかではもっとも積極的なものである……黒人が、彼らが受けている抑圧の根拠——肌の黒さ——のまわりに兄弟たちとともに結集することの必要性を、そして……ひとつの集団として行動することの必要性を理解していくことが、その真髄である……『黒人意識』の哲学は、集団の誇りを、そして、起ち上がり、思い描いた自己の姿へと到達しようとする黒人の決意を表現するものである」。「『テーゼ』は白人人種主義である。それゆえに、これに対する『アンチテーゼ』は、事実上、白人人種主義が黒人から奪おうと務めている黒人間の強固な団結でなければならない。したがって、これらのふたつの状況から出発して、われわれは、ある種の均衡——権力政治の余地がないような真の人間性——に到達することを望みうるのである」¹²。

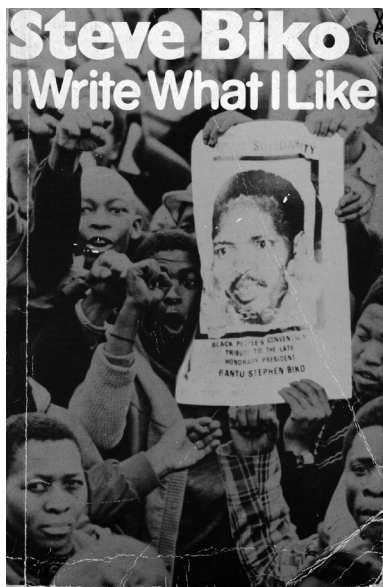


写真2

Steve Biko, *I Write What I Like* (『俺は書きたいことを書く』の表紙 (Heinemann African Writers Series))。

このように、黒人意識運動における解放の主体は「黒人 (Blacks)」であった。この用語はアフリカ大陸ではあまり多用されず、南アフリカ固有の文脈では、バンツー (Bantu)、原住民 (Natives)、カフィル (Kaffirs) などと並んで蔑称として使われることが多かった。ビコたちがこの言葉

に積極的な意味を込めて使うにあたって、当時のアメリカ合衆国の急進的な黒人解放の用語法の影響を受けたことは間違いないけれども、ビコ自身は、自らの運動が「コカコーラやハンバーガーの文化的背景を持つ無責任な人々」の運動の亜流と見なされることを好まなかった¹³。公民権運動の思想と実践に対する言及も、周到に回避されている。言葉をめぐってもうひとつ注目すべきは、黒人意識運動における黒人が「アフリカ人」「カラード」「インド人」のすべてを包含する主体を構成する「呼びかけ」だったということである。それは、マンデラの南アフリカ人民、ソブクウェのアフリカ人とは異なる、第三のフレームを提示するものだった。

ビコは、非暴力も暴力も、説くことはなかった。巨大な白人軍事国家を前にして組織的な武装闘争を試みることは、当時の状況ではまったく不可能だった。そのかわりにビコが発したメッセージは「死を怖れるな」である。「人は誇りをもって生きているのであれば、死んでいる……死はすこぶる非合理的なものだが、もし人が死に対する恐怖を克服することができたら、そのとき、人は歩みを進めることになる」¹⁴。1977年に逮捕されたビコは、終身刑を受けたマンデラとは異なり、裁判も受けることなく警察署内で拷問され、30歳で殺害された。

藤永氏は、カリスマ的男性リーダーの不在によって、ブラック・パンサー党がコミュニティ活動に活発に取り組むことになったことを指摘しているが、これに並行するような構図は、南アフリカの黒人意識運動にも見られた。マンデラたちの世代が政治の王国を求め、レーニン型の党組織を築こうとしたのに対して、ビコの黒人意識運動はすべての解放の起点として精神の革命を求めた。ビコたちが書いた文章は回し読みされ、政治活動家たちだけでなく、芸術・文化の領域でも人びとに影響を与え、表現の刷新をもたらしていく。そしてビコら主要な活動家たちが禁止処分を受け、自宅から遠出しないように警察の監視を受けるようになると、かれらは自分の町を拠点として、手工芸や参加型農村開発、教育などの活動に取り組むようになっていった¹⁵。

黒人意識運動の活動家は弾圧を受けたが、組織をいくら弾圧しても、意識革命を抑止することはできなかった。1970年代後半にはPACは内紛で壊

滅状態に陥っていたため、黒人意識の洗礼を受けた活動家たちは、ANC 系の組織に合流していくことになる。ビコが南アフリカの若者たちにとって解放のシンボルだった時代、獄中のマンデラはほとんど忘れ去られていた。80年代、黒人意識世代の活動家たちの関心をマンデラに向け、マンデラの釈放と南アフリカの解放のアジェンダを一体化させることに成功したのは、マンデラの妻ウィニー・マンデラの功績である¹⁶。

4. 始原のアフリカニズム

ここまで、藤永氏の論考に並置する形で、1950年代から60年代初頭までの南アフリカにおけるマンデラたちの多人種民主主義の思想と、そこから分岐したソブクウェのパンアフリカニズム、そして、60年代末から70年代のビコの黒人意識運動の思想を概観してきた。

もう少し長いタイムスパンで見てみよう。17世紀のヨーロッパ人の本格的な移民とともに成立したアメリカ合衆国と南アフリカは、先住民の駆逐、白人至上主義、そして黒人差別という原罪を内包しながら国家形成を遂げてきたという共通の経験を有している。19世紀末の南北戦争、そして南アフリカ戦争という白人どうしの熾烈な全面戦争を経て、アメリカ南部と南アフリカには、厳格な人種隔離体制が築かれた。支配的な白人集団内部の対立が両国に厳しい人種隔離を生みだす一方、そのような対立が存在しなかったブラジルにおいては、両国に比肩しうような隔離体制は成立しなかったというのが、アンソニー・マークスによる三カ国の人種関係の比較研究の結論であった¹⁷。人種主義体制の比較研究においてアメリカ合衆国と南アフリカ共和国を同一のグループに分類することには、歴史的な必然性があるわけである。

その両国の黒人世界の共鳴が最高潮を迎えたのが両大戦間期であり、クリティカルな転換点としての当時の状況を活写したのが荒木圭子氏の論文である。それまで、白人移民による南アフリカの征服に対する抵抗運動は、独立したアフリカ人首長国や王国による軍事的な抵抗運動という形をとっていたが、それぞれは互いに孤立したものであり、20世紀初頭までにすべて撃破

されていった。ところが第一次世界大戦後、南アフリカを覆い尽くす近代という舞台装置のもとで、人種主義に対する水平的な異議申し立てが広がっていく。そして、この状況に火をつけたのが、マーカス・ガーヴィーの思想に触発されたパンアフリカニズムのエートスだったのである。

ガーヴィーイズムが上陸したケープタウンは南アフリカの南西の港町であり、1652年にオランダ東インド会社の拠点が置かれ、ここから南アフリカの植民地化が始まっていった。現在でも白人の人口が多い町だが、住民の多数派を占めるのはカラード、すなわちオランダ支配のもとで駆逐・吸収された先住民、アジア人奴隷、そして白人の血筋を様々な割合で引く人びとである。万国黒人地位改善協会（UNIA）機関紙『ニグロ・ワールド』のメッセージは、カリブ海出身の黒人船員たちが媒介となって、このケープタウンから南アフリカのカラード、アフリカ人に爆発的に広がっていった。荒木氏が記すとおり、「まさに大西洋地域における『想像の共同体』としての『黒人世界』」が形成されたのであるが、カリブ海起源のパンアフリカニズムの衝撃がアフリカ大陸において大衆運動に結実した事例としては、当時の南アフリカが最大規模のものではないかと思う。

南アフリカのガーヴィー主義の担い手となった産業商業労働者組合（ICU）は、アフリカ人とカラードの統一による「黒人」の団結を訴えたが、これが前項のビコの黒人意識運動の枠組みを先取りするものであることは、たいへん見やすい。1919年に結成されたICUの指導者クレメンツ・カダリーが南アフリカではなくニヤサランド（マラウイ）の出身者であり、彼に引き続く一連の指導者たちが「アメリカ黒人」のイメージを駆使することでアフリカ人の支持を拡大していったことは、運動のコスモポリタンの性格をよく表している。ガーヴィー主義はジェイムズ・タエレを通じて、白人を排除するアフリカニズムの色彩を強めながらANCにも浸透していくが、当時の動きは、50年代末にANCから飛び出してPACを結成したソブクウェたちのアフリカニズムの有力な源流のひとつになっている。多人種的な共産党とアフリカニストは南アフリカの解放運動の主導権を求めて争ったが、コミンテルンの支持を受けた共産党は20年代に「南アフリカ原住民共和国」を求める方向に舵を切っており、アフリカニストを隊列に取り込むことは党是に

なっていた。従って、共産主義者にとっても、ガーヴィー主義者は敵ではなく工作の対象だった。トランスカイの農村部において、ガーヴィー主義の思想が独立教会の千年王国的な救済の観念と結びつき、暴力的な農村反乱に結びついていったことも、パンアフリカニズムが南アフリカにもたらした影響の広さと深さを象徴する出来事である¹⁸。

ガーヴィー主義が南アフリカにもたらしたこのような衝撃を、荒木氏は実に手際よく、包括的に描き出している。1920年代に南アフリカ全土を席卷し、やがて雲散霧消したガーヴィー主義の運動は、強固な組織的継承関係をもつものではなかったけれども、南アフリカの近代的な解放運動の歴史を画する重大な出来事であった。南アフリカのガーヴィーイズムの空間には、その後の南アフリカにおいて問われていくことになる課題の多くがまるごと投入されていたのである。すべてはここから始まったと言っても、言い過ぎではない。

ガーヴィーのメッセージが、ハーレムの黒人たちと南アフリカの黒人たちの心の琴線に触れ、ほぼ同じ時代に大衆的な反応を呼び起こしていったことは、パンアフリカニズムの同時代性を考えるうえで非常に興味深いことである。そのうえで注意しておきたいのは、アメリカ合衆国と南アフリカの人種問題には鏡像のようなところがある、ということだ。つまり、そっくりだが左右が逆だ、ということである（粒子のスピンの方が逆向きなのかもしれない）。20世紀を通じて南アフリカの人口構成は白人が1割強、アフリカ人が7割強であったが、これはアメリカ合衆国の白人と黒人の人種構成をほぼ逆転させた数字だった。アメリカ南部など黒人が住民の多数派を占める場所はいくらでもあるが、アメリカ合衆国のナショナルな空間としては、白人が多数派で、黒人が少数派であり、そのことはヘゲモニックな言説の性格にも大きな影響を与えないわけにはいかない。他方、南アフリカはアフリカの国であり、そこでは究極的には多数派の黒人の意思が支配することは自然であった。したがって南アフリカにおいては、ヨーロッパを起源とする自由主義思想の影響も限定的だったように思われる。

5. おわりに

現代の南アフリカにおいては、マンデラが平和主義者として称えられる一方で、過去の人種主義に対する闘い——差別に対する憎しみの共有——は存在しなかったかのような言説が支配的になっている。公民権運動とブラック・パワーの記憶をめぐる闘いがそうであるように、南アフリカにおいても、若き日の共産主義者としてのマンデラの再評価、そして、忘れられつつあるソブクウェやビコの思想の再評価が必須になっていくだろう。

ここで最後に、南アフリカの解放運動において、解放の主体のフレーミングがどのようなものであったのかを整理しておきたい。マンデラと ANC にとって、解放の主体は黒人も白人もない「南アフリカ人民」であった。釈放後のマンデラは、すべての人種・民族集団が共存する平和な「虹の国」のレトリックを駆使したが、共産主義者にとっては、一人一票の多人種民主主義の実現は、二段階革命の端緒にすぎなかった。多数派アフリカ人の民族主義は、このような普遍的なプロセスを率いていくものだと考えられた。

ソブクウェにとっての解放の主体は「アフリカ人」であった。肌の色にかかわらず、アフリカ大陸に忠誠を誓うすべての個人がアフリカ人になりうるのであり（中間団体の否定）、南アフリカの解放はアフリカ大陸全体の解放の一部として位置づけられる。ただしソブクウェの支持者のアフリカニストたちは、白人やインド人やカラードといった人びとを、個人としての忠誠を確かめる前に、戦線から排除する傾向があった。

ビコにとっての解放の主体は「黒人」であった。白人至上主義に対する自然な反応は、白人でない者の団結を求めることである。多数派のアフリカ人の戦列にインド人とカラードが合流し、単一の黒人という解放のエージェントが成立する。ただしビコは、黒人の団結と誇りが回復され、黒人と白人が真に対等な立場で対面できるようになった時、そこでは権力政治の余地が消滅し、「真の人間性」が立ち現れると考えていた。

現在までにアフリカニズムや黒人意識を唱える政治組織はほぼ消滅しており、南アフリカ国会において6割を超える議席を独占しているのは、かつてマンデラが率いた ANC である。ソブクウェやビコの思想の洗礼を受けた者

たちがANCに参加したという状況もある。だが、解放から20年、ANCのもとで「南アフリカ人民の統合」が進んでいるかという、まったくそうは見えない。アフリカ人が数の優位を示す一方で、白人、カラード、インド人は自らの繭に引きこもる傾向がある。現代の南アフリカ社会が直面する最大の挑戦は黒人内部の格差の拡大であるが、最大野党の指導部が白人に支配されている限り、高潔なマンデラ大統領の後を継いだ政権幹部たちがいかに汚職にまみれていようと、ANCに対する大衆の支持は揺るがないだろう。

もう20年ほど前、イエール大学の南アフリカ史家レナード・トンプソン氏と懇談していた時のことだ¹⁹。トンプソン氏は、ポスト・アパルトヘイト時代の南アフリカは「アフリカの国になっていくだろう」と断言した。少数派の白人はますます少数派になり、政治的にも経済的にも発言権を失い、集団としては消滅していく。ケープ地方から全土に広がった白人たちは、動画を巻き戻しするように居住地を縮小させ、ケープ地方で暮らすだけの集団になっていくだろう、というのである。そして南アフリカは、他の熱帯アフリカの国々とあまり変わらない国になっていく——それまでにはまだ紆余曲折があるだろうが、南アフリカがこれから数世紀かけてアフリカの国のひとつになっていくというのは、長期の歴史としてはその通りだろう。

では、アメリカ合衆国の社会はどこに向かっていくのだろうか。南アフリカから見ると、アメリカ合衆国の人種関係はどこか人工的だが、そこから生み出されるメッセージは、より実験的で、規範的で、普遍的でもあるような気がする。アフリカ系アメリカ人は、未来のアメリカの姿をどのように思い描くのだろうか。かれらはどのようなフレームのもとで、究極の解放を求めるのだろうか。アメリカ合衆国と南アフリカ共和国の人種関係は、20世紀の歴史においては、何度か明らかに交差する瞬間があった。両者の経路は、これから分岐していく一方なのだろうか、それとも、再びまったく新しい形で交差するのだろうか。アメリカ研究者の方々に問いを開くことで、拙論を締めくくりにしたい。

註

¹ 両国の人種問題を比較した代表的な作品には、次のようなものがある。アンソニー・W・マークス（富野幹雄・岩野一郎・伊藤秋仁訳）『黒人差別と国民国家——アメリカ・南アフリカ・ブラジル』（春風社、2007年）。George M. Fredrickson, *Black Liberation: A Comparative History of Black Ideologies in the United States and South Africa*, New York: Oxford University Press, 1995; John W. Cell, *The Highest Stage of White Supremacy: The Origins of Segregation in South Africa and the American South*, Cambridge: Cambridge University Press, 1982.

² その素材として、次を参照。ネルソン・マンデラ（峯陽一監訳・鈴木隆洋訳）『自由への容易な道はない——マンデラ初期政治論集』（青土社、2014年）。

³ 同上、248頁。

⁴ 同上、i頁。

⁵ 同上、271頁。藤永氏が指摘する連邦最高裁判決に相当するようなものは、南アフリカには存在しなかった。弁護士であったマンデラは、黒人を代表しない議会が制定した法律に黒人が従う必要はない、そのような法律に「自分自身が従う義務は、法的にも道徳的にも存在しない」、と高らかに宣言している。同上、163頁。

⁶ その分水嶺となったのは、「われわれは敗北した敵を相手にしているわけではない」とした共産党指導者ジョー・スローヴォによる次の論文である。Joe Slovo, "Negotiations: What room for Compromise?", *African Communist*, 130, third quarter, 1992.

⁷ デンゼル・ワシントンはスパイク・リー監督の映画『マルコム X』（1992年）でマルコム X 自身を演じ、映画『遠い夜明け』（1987年）ではスティーヴ・ビコを演じた。彼はビコの役割を演じきるために、実物のビコに似せて撮影前に歯並びの整形までしたという。ビコは白人リベラルが反人種差別運動の主役を演じる構図に鋭く異議を唱えたのだったが、この映画の主人公ドナルド・ウッズは、皮肉なことに、ビコの友人だった白人リベラルの新聞記者である。

⁸ ネルソン・マンデラ（東江一紀訳）『自由への長い道——ネルソン・マンデラ自伝・上巻』（日本放送出版協会、1996年）、322-323頁。

⁹ Thomas Karis and Gail M. Gerhart eds., *From Protest to Challenge: A Documentary History of African Politics in South Africa, 1882-1964, Vol. 3, Challenge and Violence 1953-1964*, Stanford: Hoover Institution Press, 1977, p. 516.

¹⁰ Ibid., p. 335.

¹¹ スティーヴ・ビコ（峯陽一・前田礼・神野明訳）『俺は書きたいことを書く——黒人意識運動の思想』（現代企画室、1988年）、55-57頁。

¹² 同上、130-131、170-171、174頁。

¹³ 同上、173頁。

¹⁴ 同上、290 頁。

¹⁵ ビコの前掲書に収録されたエイルレッド・スタッフスの解説「希望の殉教者——私的回想録」を参照。こうした黒人意識運動のコミュニティ活動の精神は、アパルトヘイト撤廃後も、HIV／エイズとともに生きる人びとの支援など、草の根のソーシャルワーカーたちのもとに流れ込んでいる。

¹⁶ ネルソン・マンデラの伝記映画『マンデラ——自由への長い道』（2013 年）は、ネルソンとウィニーの愛憎を丁寧に描き出している部分がきわめて興味深い。

¹⁷ マークス、前掲書。

¹⁸ トランスカイのコーサ人の精神世界に見られる千年王国的な救済の観念は、伝統的なアニミズムとキリスト教の習合による 19 世紀末の「牛殺し」運動のなかに表現されている。次の小説を見よ。シンディウエ・マゴナ（峯陽一・コザアリーン訳）『母から母へ』（現代企画室、2002 年）。

¹⁹ 次を参照。レナード・トンブソン（宮本正興・吉國恒雄・峯陽一・鶴見直城訳）『最新版・南アフリカの歴史』（明石書店、2009 年）。